

「口蹄疫の疫学調査に係る中間取りまとめ」に関する補完報告について

平成25年3月27日
農林水産省
消費・安全局

平成22年4月に宮崎県で発生した口蹄疫については、感染経路を究明するため、ウイルス学、疫学等の専門家で構成される疫学調査チームが調査を行い、同年11月には「口蹄疫の疫学調査に係る中間取りまとめ」を公表した。

今般、この中間取りまとめを補完するため、分離ウイルス株の性状分析、発生農家と非発生農家の飼養環境や飼育管理の違いに関する調査(ケースコントロールスタディ)及び野生動物の感染状況調査を行い、補完報告として公表した。概要は以下のとおり。

(1) 分離ウイルス株の性状分析

- ・ 宮崎県で分離されたウイルス株の遺伝子を解析したところ、同時期に香港、ロシア、韓国で分離された株と非常に近縁であること(相同性は、それぞれ99.22%、98.9%、98.59%)が確認されていたが、今回、同時期に中国で分離された株と極めて高い相同性(99.5%)を示すことが確認された。
- ・ 豚及び牛の感染試験を行い、ウイルス接種畜から同居畜への伝播を調べたところ、豚では同居後2～6日で、牛では同居後5～6日で症状が確認された。また、牛では、症状が回復した後もウイルスを排出し続けるケースがあることが確認された。
- ・ 分離ウイルス株と備蓄ワクチン株の抗原性の一致度を測定したところ、備蓄ワクチンが有効であったことが確認された。

(2) ケースコントロールスタディ

- ・ 発生の中心地域の豚農場では、畜舎が住居や生垣等の障害物で囲まれていたことが感染リスクを下げる要因として働いた可能性が示唆された。
- ・ 発生の南部地域の牛農場では、「飼料運搬車両や畜産関連業者等の農場への入場」が感染リスクを上げる要因としての関連が確認された。

(3) 野生生物の感染状況調査

- ・ 平成22年8月から10月にかけて、宮崎県内で捕獲されたイノシシ及びニホンジカ(計145頭)を検査したところ、全て陰性であった。
- ・ さらに、平成23年10月から24年2月にかけて、南九州4県(宮崎県、鹿児島県、熊本県及び大分県)で捕獲されたイノシシ及びニホンジカ(計480頭)を検査したところ、全て陰性であった。
- ・ これらの調査結果により、「野生動物が感染拡大に関与した可能性」や「野生動物に口蹄疫ウイルスが浸潤している可能性」はない、もしくは、極めて低いことが確認された。